

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【授業担当者】

所属/職名：法文学部/准教授

氏名：兼城 糸絵

授業科目名	文化人類学実習1
研修先 (大学・国・都市名)	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	令和4年8月28日～令和4年9月2日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>本研修は、文化人類学的フィールドワークを教育する上で入門編にあたる。主に、以下の4点を目的としている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。</li> <li>2.文化相対主義的な視角を獲得する。</li> <li>3.鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、事前に決めたテーマに沿って初歩的な社会調査を体験する。</li> <li>4.日韓という枠組みにおける異文化理解への到達プロセスの特性について認識する。</li> </ol> <p>この目的を達成するために、今回の実習では学生を2グループに分けて事前に研究テーマを設定した。現地実習では、全北大学の学生とともにアンケートやインタビュー、観察等の社会調査を実施した。実習期間中には中間報告および最終報告会を開催し、全北大学の教職員や学生らに調査内容に関するコメントをしていただいた。</p>	
<p>〔研修の成果〕 *事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>本年度は新型コロナウイルス感染症の影響によって例年よりも渡航手続きが煩雑になったことから、学生ともども渡航手続きに多くの時間を費やすことになった。その傍ら学生たちとは事前学習を行い、現地での調査計画のブラッシュアップに努めた。その結果、2つの成果が現れたと考えている。ひとつは、調査計画がより厳密なものになると同時に、異文化に対峙する際につい陥りがちな自文化バイアスに自覚的になることができたことである。そしてもうひとつは、グループワークで調査を行うため、役割分担を明確にし、効率的な調査を実施できるように準備ができたことである。この2点は実際に韓国で調査を行う中で大いに役立ったと思われる。また、今回の事前学習においては、韓国に滞在中の大学院生にオンラインで参加してもらったことも学生たちにとって効果的だったと考えている。韓国に行ったことがない学生たちにとって、現地に滞在する同世代の方から聞く話は大いに刺激になったようである。</p> <p>調査期間中は、全北大学の学生と協力して調査を実施した。その際、あくまで教員はアドバイザーに徹し、調査の遂行やデータの整理もすべて学生たちが自主的に行っていた。日韓合同チームで調査を行う過程で意見交換を積極的に行った結果、それぞれの学生たちは自らが持っていた「日本」あるいは「韓国」に対する文化的バイアスに気づき、それを修正することに成功したように思う。こうした経験は、合同実習ならではの出来事であるように思う。</p> <p>また、今回の実習を通じて異文化理解の方法を体得できた者も少なくない。こうした学生が海外で体験したことを周囲の人びとと共有し、異文化の見方を伝えていくことも地域のグローバル化に貢献できると思われる。学生たちは韓国の大学生とSNSを通じて現在も交流を続けており、日本(鹿児島)や韓国(全州)での再会を約束している。このような「草の根交流」がグローバル人材の育成のみならず地域活性化の鍵となっていこう。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、大きな成果を挙げている。また、事前・事後学習に韓国にいる方とオンラインでの交流を取り入れることがとても効果的であることが確認されたため、今後も柔軟に導入していきたい。</p> <p>一方、全北大学側と研修の円滑な実施のためには外部資金等による経済的援助が得られた方が望ましいが、近年の補助金の傾向として短期(1-2年程度)の資金を次々と探して獲得する必要性に迫られている。むしろ補助金は毎年獲得できるものではないので、本事業のような学内での措置が長く続くことを祈ってやまない。</p> <p>また全北大学校には、本実習のような短期滞在者が安価に宿泊できるゲストハウスが用意されている。全北大学校の実習チームを受け入れるにあたり、本学にはそうした施設が用意されていない点を大変心苦しく感じている。ぜひとも何らかの形で整備していただけるようお願いしたい。</p>	

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【授業担当者】

所属/職名：法文／教授

氏 名：尾崎孝宏

授業科目名	文化人類学実習1
研修先 (大学・国・都市名)	全北大学校(韓国・全羅北道全州市)
研修期間	令和 4年 8月 28日 ~ 令和 4年 9月 2日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>文化人類学的フィールド学教育の入門編として、以下の4点を目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する。</li> <li>2.文化相対主義的な視角を獲得する。</li> <li>3.鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、事前に決めたテーマに沿って初歩的な社会調査を体験する。</li> <li>4.日韓という枠組みにおける異文化理解への到達プロセスの特性について認識する</li> </ol>	
<p>〔研修の成果〕 * 事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>本年度は前年度までのオンライン実施で得られた知見を活用し、事前学習における調査計画のブラッシュアップに全北大学校の学生の意見を取り入れつつ行わせることができた。その結果、学生が考える調査の問題設定および調査計画に無意識的に介在してしまう日本的な文化的バイアスの存在に事前に気づき、修正できた。</p> <p>さらに本年度は3年ぶりとなった実渡航のメリットも活かし、韓国訪問段階において調査計画に残っていた日本的な文化的バイアスも現地調査の比較的早い段階で参加学生が自覚できた。その結果、社会調査実習を円滑に進めるとともに、無意識に介在する文化的バイアスの影響について学生自身が強く自覚することができた。さらに、こうした経験を通じて自文化を相対化する必要性も自覚することができたと思われる。</p> <p>今回の社会調査実習では、現地の調査活動については基本的に教員はタッチせず、両校の学生の自主性に任せて現地調査を行わせた。全北大学校に留学中の博士後期課程の院生などを通じ、事前学習段階より両者のコンタクトを行わせたため、学生間の信頼関係がすでに構築された段階で全州での調査が実施できた。また本年度の実習はコロナ禍の状況が完全に終了しない段階で実施したため、参加人数こそ例年と比べて少なかったものの、きわめて熱心な学生ばかりが参加する結果となり、例年以上に学生同士の交流や議論が活発であった。</p> <p>例年、本実習に参加した学生の中から韓国を中心とした海外の大学へ短期留学に赴く学生が高頻度で出現しており、本年度も短期留学を予定している学生が複数名存在する。こうした学生を中心に、帰国後も地域のグローバル化を推進する人材が着実に育成されていると思われる。また本実習に参加した全北大学校の学生の1人は、2022年10月より交換留学生として鹿児島大学に来る予定である。このように本実習は日本人学生のグローバル化だけでなく、鹿児島に興味を持つ海外の若い世代を誘引する一助となっており、その意味でも地域の活性化に寄与していると思われる。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本年度の実習は、韓国ビザの取得や合計3回のPCR検査など、今まで必要でなかった経費支出に迫られる機会が多かった。加えて、近年の航空チケット代の高騰や韓国での物価高、円安などの要因により、今までと比べてはるかに多額の出費を伴う実習となった。</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、加えて年々その成果が向上しているため、安直に中止するという選択肢は取れない。しかし、グローバルセンター長という立場も兼任する身としては本学の懐事情も承知しており、いつまでも本経費が継続することを期待することは難しい。その意味では本年度、少なからぬ追加出費も厭わない熱心な学生が少数ながら集ったという状況は、今後の実習の実施方針に少なからぬ示唆を与えてくれるように思われた。つまり数に拘泥せず、自腹でも行きたいという熱心な学生のみをターゲットにしても実施できるという見通しが得られたように思われる。</p>	